

「聖書協会共同訳」

2020年07月01日

「聖書協会共同訳」が2018年に刊行された。「新共同訳」は1987年に出版された。私が教会に行き始めた時、読んだ「口語訳」は1955年に改定された聖書であった。言葉は生きもので、時代と共に変わっていく。聖書も、おおよそ30年毎に訳し直されている。旧約聖書はヘブライ語から、新約聖書はギリシア語からと、古い時代の言語を翻訳する作業は並大抵ではない。また、訳し方によって意味が全く違って来るので、神学的な立場が違っていると訳語も違い、翻訳作業における意思統一には困難があるだろうと思う。「聖書協会共同訳」は、声を出して読んだ時、言葉が流れるように訳されていて、読み易いと感じた。

「聖書協会共同訳」のマタイ福音書から、ショートメッセージを書いてきた。際立った違いを覚えることはなかったが、ガラテヤ書2章16節の翻訳に、大賛成である。この翻訳だけで、「聖書協会共同訳」を刊行した意味があり、これからの教会形成に有効な方向性を指し示す。「口語訳聖書」は、「人の義とされるのは律法の行いによるのではなく、ただキリスト・イエスを信じる信仰によることを認めて、わたしたちもキリスト・イエスを信じたのである」、「新共同訳」は、「けれども、人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされると知って、わたしたちもキリスト・イエスを信じました」と訳している。ちなみに、「岩波訳聖書」も「フランススコ会聖書訳注」も、「信仰による義」と訳している。宗教改革を起こしたマルチン・ルターは、パウロから「行為義認」ではなく、「信仰義認」を福音の核心と受け止めた。ルターの聖書理解を継承し、上記の聖書は皆、「信仰による義」と訳している。最も新しい「聖書協会共同訳」は、「しかし、人が義とされるのは、律法の行いによるのではなく、ただイエス・キリストの真実によるのだということを知って、私たちもキリスト・イエスを信じました」と訳している。「信仰」はギリシア語で「ピスティス」だが、「真実」と訳することができる。そして、「キリストへの信仰」と訳せるが、「キリストの真実」とも訳することができる。「聖書協会共同訳」は「キリストの真実」と訳したのである。キリストの真実とは、主イエスの神への真実の全てを指していようが、私は「十字架と復活」と受け止める。そうすると、「キリストの真実・十字架と復活が義とする」という理解になる。この理解は、「キリストを信じる、信じない」の前に、また、「キリストを知っている、知らない」の前に、全ての人が既に義とされているということになる。そして、パウロの福音理解は、これ以外ではない。

この件に関し、二人の人との会話を思い出す。ある女性の受洗準備をしていた時、彼女は「私は洗礼を受けて救われますが、夫はどうなるでしょうか」と聞かれた。私は「あなたの夫もキリストの十字架と復活によって、既に救いの中にあります。あなたは、それを知らされ、恵みに応えて洗礼を受けるのです」と言った。彼女は満足そうだった。人は皆、キリストを知る、知らないに関わりなく既に救われ、神からの是認を受けているのである。

もう一人は「私は清水の舞台から飛び降りる決意を持って洗礼を受けた」と言われた。私もそうだから、納得できる。しかし、その人は、そのように決心して洗礼を受けた私と洗礼を受けてない人を同等に扱ってくれるなど言うのである。これは、私の信仰の持ち方が良かったので義とされた。信仰という良い行為が義とされたという「行為義認」になる。パウロの告げる福音は、キリストの真実・十字架と復活が、全ての人を、既に、無償、無条件で、義とした福音、喜びで、それが「信仰義認」という意味である。この解釈に立った「聖書協会共同訳」は正しく、この福音を教会はしっかり宣教すべきであると思っている。この福音理解に立って、ガラテヤ書からのショートメッセージを書いていきたい。